道橋倒木等御届有之候事

②「御用日記」（佐伯）

（七月廿八日）

一、八ツ半時過頃強致地震候…

…

一、何そ津波と申程之義ニハ無之候得共、甚強地震後其上沖相高汐ニ而刻限不相応ニ汐之差引暫時之間度々有之候付万一大変之程も難斗何茂無心元存候…

…

（八月二日）

一、蒲江浦御番人菅四郎右衛門申越候此間之地震ニ而御門瓦少々落、同左右塀損申候段申越候付九左衛門へ申達、御番所附浦々御堂致御修復候様廻状ヲ以可申遣旨御勘定頭へ申渡候

③「御会所日記」（臼杵）

豊後国臼杵私領分当七月廿五日暁より未ノ刻迄大風雨、同廿八日卯ノ刻より雷雨、申ノ刻より地震強、八月朔日暁より酉ノ前迄大風雨仕、城内櫓・塀其外所所破損仕、…

地震ニ付損所之覚

一、潰家　五百三拾壱軒　但土蔵共／一、半潰家　弐百五拾三軒　…／一、潰入田畑荒貳千六百六拾六歩　内　田方　六百四拾五歩　畑方　弐千弐拾壱歩…

七月廿五日・八月朔日風雨ニ付損所之覚

一、潰家　弐百七拾五軒／一、半潰家　百九拾三軒…

④「府内藩記録」

一、明和六己丑年七月廿八日今八ツ時過頃大地震御城中其外御家中家敷大破六拾年以前之大地震同様之儀ニ付町方土蔵等大破右地震最中大雷雨

※　文化 13 年 12 月 18 日（西暦 1817 年 2 月 3 日）地震　→被害記録なし

①「温故年表録」

豊後臼杵地震強し、夜子の刻

１６　天保 12 年 9 月 27 日（西暦 1841 年 11 月 10 日）…　熊本に遺る史料のみ。府内藩記録には記事なし。

①「熊本県史」

（9.27）鶴崎地方地震で大被害

②「肥後近世史年表」

鶴崎地方地震、倒家破損多し

１７－Ｖ　安政元年 11 月 4 日－7 日（西暦 1854 年 12 月 23 日－26 日）地震・津波

…安政南海地震＝安政元年 11 月 5 日（西暦 1854 年 12 月 24 日）

①「米水津色利浦文書〈塩月家文書〉」

一、四日　辰下刻　地震　潮満干数度有之

一、五日　甲（申）下刻　大地震　高潮　度数不詳

色利浦平生満潮より九尺　壱番潮元屋敷(1)水神前

東風網代太七(2)方前迄
大庄屋所(3)床下迄、畳濡不申
荷物後ノ山へ持運ひ、大庄屋・皆合(4)・召仕の者
男女四五人相残、山へ致小屋掛居候、家内子供
ハ西谷孫右衛門方へ逃行候、
一、村方不残最寄の山端へ逃去、致小屋掛候
但、東風網代ハ廣岡、中江ハ尾はな並ニ薬師庵ノ上
一、浦廻り衆弐人、土屋石右衛門殿・江藤源助殿被居合候
(1)最初に打ち寄せてきた潮。御手洗大庄屋のもとの屋敷。薬師下にあった
(2)穂積氏
(3)宝永の津波以後宮の下に移転
(4)かいごう。大庄屋付きの書役

②「御用日記」(佐伯)
(安政元年十一月)
一、昨四日朝四ツ半時頃軽き致地震、沖合汐不時満引有之不穏趣之処、今夕申之中刻大地震、沖合高波ニ而市中人気不穏候ニ付、先年之御当りを以津波為相図大筒持せ、蟹日坂・中村外江小頭并足軽共差遣人気相鎮可申哉と儀右衛門江申達候処、其通申聞候ニ付、火之廻之面々并手附見廻方足軽共市中立廻候様申付候
一、万一此上大地震・津波等有之候ハヽ、宝永四亥年之御当りを以大手搦御門開之、御家中并市中之者共立退候ハヽ、御城内江入可申哉と儀右衛門江申達候処、其通申聞候ニ付、夫々江申渡候
一、申ノ下刻、俄ニ高汐川内ニ込入、枡方大土手外水一面ニ相成、市中大ニ致騒動、御城内且御城山最寄江皆々逃登、人気致恐怖候ニ付、私共始列座御役人共早速川筋江罷越致見分候処、汐折々急ニ満引有之、度々致地震、益騒立候故、儀右衛門様何茂火事装束ニ而会所江出座、御城内御締等夫々申付、猶又町奉行共市中相廻夫々及差図候、夜中茂軽キ地震不相止、御家中并市中之者共終夜山ノ手ニ罷在候ニ付、足軽共数人為立廻、火ノ元別而入念候様儀右衛門申聞候ニ付、夫々江申渡候

③「御会所日記」(臼杵)
五日　晴れ　申ノ半刻過大地震／一、今申ノ半刻過地震不一方大動／城中所々御破損所有之／御城下方々大破ニ付、両月番始何茂追々登城／慶昌院様江は御内所御立退、御花畑江被成御座候付、何茂被出御機嫌相伺之、御用人代り合相詰、無程沖鳴動洪波打寄来、辻井戸辺等打揚ケ、御堀桂所石打返し、道洗ひ崩シ、大手御門内外も汐込入、祇園洲過半同様、地低之場所は通路難出来、右ニ付御門内住居之面々家内迄御城中江立退、御門外海辺之類は地高之場所・宮・畑江馳登り、其後も沖鳴潮差引繁ク震リ不穏、一統騒動甚敷、食事等難渋ニ付／御城下之分江握飯・粥等御救被下、御台所且町酒家等ニ而焚出申付也
○「〔臼杵藩〕記録」(臼杵)
同月(安政元年十一月)五日　一、五日申ノ半刻過大地震□方より詰□打寄、同七日辰ノ刻大地震有之委細雑之部ニ記置候、右ニ付被仰出候義者此部ニ記シ其外御□等夫々之部ニ記置候事
同月六日　一　大地震ニ付殿様為伺御機嫌今日九ツ時□□侍中御醫師登城小侍中今日□□江罷出候様右之趣被得其意支配有之面々者支配中江も可相達候旨御触有之

④「坂の市郷土史」

安政元年甲寅年 11 月 4 日酉の上刻（午后 5 時 30 分）より大地震がありて、酉の下刻（午后 6 時 30 分）より大海嘯に襲はれたのであつた。此の地震は 11 日間におよび、15 日の巳の刻（午前 10 時）に止んだとのことであるが漁船の顛覆家屋の倒潰流出夥しかったのである。

⑤「豊後鶴崎町史」

人家倒屋数 100 戸、定米 413 石支給

⑥「仲摩嘉左衛門伝…大分市高田」

15 日まで餘震あり、上徳丸村本塘筋 33 間破損

⑦「広瀬久兵衛日記」（府内在住時）

十一月四日　朝五ツ半過地震、暫、昼後三度、例刻汐満引去リ、又八ツ時前高汐満ル

十一月五日　晴　申中刻大地震　汐数度満干有之　…少々地震之様ニ相覚候処、無程大地震ニ而北ノ口櫓も破却可致躰ニ相見候間、廿間程跡ニ戻リ、平地ニ座し、震止候ニ而帰宅、暫時之事ニ候得共、北ノ口御多門并櫓共潰込ニは不相成候

⑧「山香郷土史」

安政元年 11 月 5 日地大に震う、前夜より屢々小動し、爾後震動止まず、7 日又大いに震う、人民皆掘立柱の茅屋を仮立し避けて之に居る。

⑨「山神百手日記」（杵築市山香町向野）

一　寅十一月五日七ツ時ニ大ぢしん、又ゝ七日四ツ過ニ大ちしん五日より者大分強候

一　此辺者家□□□そんじ方無之候、長須村家損方有之候、高田ニも少ゝづつ同様之事、東方ニ而ハ府内者大損之由

一　海辺大津なみニて損方強候由

⑩「寅日記〈余瀬家文書〉」（豊後高田市大字上香々地）

（十一月）五日

一　東蔵御立合ニて伜罷出ル

一　夕方大地震

…

七日　祭り

一　朝、氏神祭礼、熊毛伝左衛門様三□□参る

一　朝五ツ下頃、大地震ニ而殊の外心配、当郡者別□之事も無之候得者、杵築領城下大損事、横なた・ふ内・鷽さき・乙津□□女中両人即死、大火と成ル、米屋幸左衛門と申家共ハ大損事由

⑪「惣町大帳」（中津）

十一月／一、四日昼七ツ半時頃地震、尤軽シ、五日九ツ時軽シ、同日七ツ半時地震誠此辺ニ而は前代未聞之事、凡四半時程ゆり、泉水其外紺屋藍瓶等水あふれ出、酒醤油屋ハ無別条潰れ家無之、同夜五ツ時軽く四ツ半時強く、尤昼より軽八ツ時強く震、六日昼八ツ時軽くゆり、同夜五ツ半時同断七日五ツ半時強くユル、尤短シ、同日九ツ半時震中位、其後八日九日折々軽地震有之候へ共、格別之義は無之町中少々之破損有之候へ共潰家等一切無之

此節之地震諸方は殊之外強く趣別而豊後府内御城下は八歩通潰れ家有之候由、其外鷽崎別府近所村々迄半潰家有之、竹田御城損候由、町家無別条、日出は軽く杵築は強御城破損町家四分通潰、浦辺ハ強く真玉ハ軽し、高田潰家三軒破損数々長須潰家三十軒余破損

百軒程、中須賀宇佐辺も強く候へ共、潰家無候由、姫嶋地震出火ニ而一軒も不残趣ニ候、西は曾根辺は中津同様小倉御城下は当地よりハ強く黒崎三十軒程潰家其外九州不残大地震…

⑫「万年記」(国見町・竹田津村庄屋竹田津家文書)

一　十一月五日七ツ時分前代未聞ノ大地震　夫より通夜翌未明迄　八九度も地震度々ニテ家ノ内ニハ居得不申　外へ出候テ夜を明し申候

一　右地震ニテ来浦宮鳥居辷候テ　宮崎石見娘七才ニ相成候ニ　辷懸リ候テ即死ノ由　其外処々ニ変異有之候由也

一　同七日五つ時　亦々不相替大地震　誠忌怖難申候

一　去ル五日ノ地震姫島別シテ大変　居家　土蔵　厩抔都テ棟数八拾軒程倒家相成　石橋落　鳥居一基倒　庄屋元も被居不申　土蔵ニ移候よし　御分知飛脚千燈へ立寄候処御城下至テノ大変　惣役所邊より六軒町互り　多分ニ辷家有之候由

…

一　去ル五日七日大地震より　冬中日々少しづつノ地震致候　其内平常ノ大地震と申位の儀ハ　度々有之候

１８　安政２年６月 24 日（西暦 1855 年８月６日）地震

①「速見郡史」

地震あり、杵築城内破損す、幕府に請ひ、10ヶ年賦を以て 2000 両を借入れて修復す

１９　安政２年 11 月２日（西暦 1855 年 12 月 11 日）地震

①「豊後立石史談」

大地震、立石地方にて古今未層有の震災、家屋の傾倒せるもの多く、２、３日は戸障子畳など持出し、仮小屋を設けて之に住みたる程なりき。江戸の大地震より後れたること 30 日、11 月２日朝のことであつた。是れ大正 12 年の関東大震より実に 69 年前の事なり

２０　安政４年８月 25 日（西暦 1857 年 10 月 12 日）地震

①「理科年表」

諸城破損　震源は大分三崎半島線の東方

２１--Ⅵ　昭和 21 年 12 月 21 日（西暦 1946 年）　地震・津波　…　記事省略

参考文献

1　大分測候所編『大分県災害誌　資料編　災害記録の部』(大分測候所・1952 年)

2　震災予防調査会編『大日本地震史料』(思文閣・1973 年復刻)

3　東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』(社団法人日本電気協会ほか・1981 年～)

4　宇佐美龍夫編『新編　日本被害地震総覧』(東京大学出版会・1987 年)

5　〃　『最新版　日本被害地震総覧』(東京大学出版会・2003 年)　ほか

神　職

神職階位（神職の学識によって階位検定委員会が選考）

浄階（じょうかい）・・・・・明階を得た後神道の研究に研鑽して業績をあげた者に与えられる。

明階（めいかい）・・・・・・４年の神道系大学を卒業の後(正階)２年の奉仕と研鑽をつんだ者。

正階（せいかい）・・・・・・一般神社の宮司、別表社の禰宜に必要。

権正階（ごんせいかい）　　正階以下は神職養成機関、階位検定講習などで与えられる。

直階（ちょっかい）

神職身分（経験功績によって身分選考委員会で決定）

		神職数	袍	袴
特級	表彰規定第二条第二号表彰者	91	黒綾	白固織
一級	表彰規定第二条第一号表彰者及び浄階で身分選考委選考	243	黒綾	紫固織
二級上	別表神社の宮司・権宮司及び二級で身分選考委選考	2066	赤綾	紫固織
二級	別表神社の宮司・権宮司及び三級で身分選考委選考	4579	赤綾	紫平絹
三級	権正階以上の階位を有する者	14563	緑綾	浅黄平絹
四級	その他の神職			

平成１６年神職　　合計 21542

職称

	宮司	権宮司	禰宜	権禰宜
別表神社	明階以上		正階以上	権正階以上
一般神社	権正階以上	なし	直階以上	

史跡探訪レポート

（一）市内―朝見地区

研修部

本年度の市内史跡探訪は、八幡朝見神社を中心とする朝見地区と決定し、六月九日（土）に下見をおこなった。三重野・恒松両副会長及び矢島・山添研修担当理事に松岡事務局長が、八幡朝見神社及び周辺を下見し、朝見地区ボランティアガイドの大野洋一氏の案内で長松寺・旧朝見の湯浴場跡や温泉神社発祥の地の碑等を加えて見学地の検討をした。後、別府の水がめ朝見浄水場の下見をし、水源の確認などを行った。

本番は八月二十六日（日）に八幡朝見神社駐車場に集合し、朝見浄水場見学から始めた。当日は台風が接近していたが大雨にはならず、全日程を予定通り行うことができた。

浄水場に向かう行程は外山理事による案内で「量水室」の説明に始まり、場内は水道局の課長さんにより詳しい説明の中、付属設備まで探訪でき、浄水場の役割や大切さを理解できた。朝見浄水場の歴史を外山理事から聞き朝見浄水場を後にした。その説明の概要を寄せてくださいましたので、最後に載せておきます。

次いで裏道から朝見神社に移動し、朝見文庫で、後藤会長から朝見神社の歴史をはじめ、文化財や所蔵物の説明を受け、神社の見学を行った。参道を逆に下り、会員の大野洋一さんの案内で、石畳の説明など受けながら長松寺に向かった。

長松寺には大回りをして表参道から山門を通り、本堂に上がり、三重野副会長から萬年山長松寺の歴史及び禅について説明を受けた。

八幡朝見神社にて

史跡探訪レポート資料（朝見地区）

※本年度より当日配布資料をA5版厚紙裏表印刷として、保存し易くすることにしました。ここでは、様式が違いますが内容をそのまま掲載します。

イ、朝見浄水場

1　上水道

ア　敷設計画の発足

①　提起　明治三八年八月、町長日名子太郎が町会に「上水道敷設工事企画」を諮問同意を得る。

※明治四〇年別府市制施行↑別府・浜脇両町合併

イ　敷設計画の策定

①　大正二年七月　内務大臣、別府市水道敷設許可

②　大正三年七月二六日、朝見浄水場敷地で起工式・地鎮祭挙行、工事着手↓大正六年三月三一日竣工

ウ　計画の詳細

①　取水方法　自然流下法

②　水源　乙原瀑布　五分の三引水　堰堤構築↓二週日間の水量確保

鮎返瀑布　五分の二引水　小貯水池造営。

上畑に濾過・配水池構築、浄水を鉄管で市内に配水

③　排水量及び予定人口　一日一人、三立方尺　二万五千人対象

2　上水道増設（人口増加等に対応、市長神澤又一郎）

ア　計画　人口十万五千人に対応一日一人六立方尺給水

イ　設計　水源地乙原送水路線、堰堤基脚より二段とし、既設送水路に沿い一条の鉄管を付設。

ウ　工事　大正十五年二月起工　昭和二年十一月竣工

エ　水道拡張区域　蓮田町・朝見方面・寶町以西別府公園までの地域・北小学校北側地域（延長一〇里）

3　大別府市誕生後の水道事業（昭和十年、別府市・亀川町・朝日村・石垣村併合）

ア　三町村水道の併合整備

①　亀川町水道（昭和三年完工）・朝日村水道（昭和九年完工）併合

②　昭和二十二年　石垣地区水道敷設完工

4　新市街地の形成と大分川水脈の導入

ア　人口の増加　戦災なし、引揚者流入

昭和十年　六二、〇〇〇人

昭和二十二年　九六、六八三人

三十五年　一〇七、七四八人
四十年　一一八、九三八人
四十五年　一二三、七八六人

イ　県営別府地域利水事業＝大分川取水

①　工事期間　昭和三十八年四月一日～昭和四十四年六月三十日

②　庄内町大分川取水→朝見浄水場へ送水、水路総延長二〇・七キロ（地下水路八km）

③　水源確保　最大日量九万トン＝十三万五千人（一日一人六六〇リットル）

ウ　扇状地中央部総市街化など可能
南立石・朝日・鶴見・大平山・緑丘各地区等市街化

ロ、八幡朝見神社

1　草創

建久七年（一一九六）、豊後初代守護職大友能直が鎌倉「鶴岡八幡宮」のご分霊を、龍ヶ岡（現乙原〈現上原「一の出」〉）に勧請したことに始まるという。

2　社殿の変遷

ア　正平三年（一三四八）＝南北朝時代の南朝年号、鶴見山噴火により、社地崩壊し現在地に遷座。

イ　慶長三年（一五九八）＝豊臣秀吉没、震災発生、本社殿罹災し什宝・旧記など壊滅。

ウ　寛文十年（一六七〇）＝江戸幕府四代将軍家綱時代、社殿・拝殿・神楽殿の再興。

3　祭神

誉田別命（ほむだわけのみこと）＝応神天皇・気長足姫命（おきながたらしひめのみこと）＝神功皇后など四神を祀る。

4　主な宝物

ア　源頼朝が大友能直に与えたという口伝のある甲

イ　楠木正成の所持品といわれる蟇股古鏃

ウ　石垣原合戦で吉弘統幸が所持したと、後藤碩田奥書のある小旗

エ　嘉永二年（一八四九）、後藤碩田が写図した石垣原古戦場の図

オ　文化十年（一八一三）、町人らが寄進した神鏡

カ　中世文書・近世文書多数

5　参道と境内の文化財など

ア　表参道二の鳥居までの敷石に、「十二支」の彫像が刻まれている。

イ　表参道階段敷石の中に、「ひょうたん石」・「さかずき石」などがある。

ウ　参道の階段の上に杉の巨木「夫婦杉」がある。二人で通ると結ばれるという。

エ　神社林は、特別保護樹林・市生物環境保護地区に指定されている。

オ　県天然記念物に指定の「大楠木」は樹齢一千年を越え神社のご神木である。

カ　神社の社殿右手玉垣の元に、名水が湧き出て御神水となっている。江戸時代天明の大飢饉の際、ここだけ清水が湧き続け、人々を救ったことに由来する。「萬太郎清水」とも云うが、親孝行息子の善行に由来する。

『八幡朝見神社の歴史と文化』
（発行者 神 日出男）より

ハ、萬年山長松寺

1　宗派　曹洞宗永平寺派

※参考　禅宗→鎌倉時代に開宗、武士階級の帰依を背景に鎌倉時代以降普及

①　臨済宗　開祖＝栄西、入宋（一一八七～九一）幕府の保護・鎌倉時代に北条政子が鎌倉寿福寺、二代将軍源頼家が京都建仁寺建立・室町幕府三代将軍足利義満は五山・十刹の制で寺格を定めた。京都五山・鎌倉五山

※座禅　公案（禅問答）、師の出す問いを通して悟りに至る

②　曹洞宗　開祖＝道元、入宋（一二二三～二七）冥利忌避→越前大仏寺に移り、永平寺とする。地方の中小武士・農民の帰依

※黙照禅　只管打坐、ただひたすら座禅を組むことで、悟りに至る

2　本尊　釋迦牟尼佛

3　由緒　（寺伝による）

ア　用明天皇治世（五八六）百済僧豊国法師創建→仁聞菩薩中興「寶籠山阿弥陀寺」と号す

※仁聞菩薩　下毛・宇佐・国東・速見の寺院開基とされる伝説上の人物

イ　神亀三年（七二六・聖武天皇）詔して水田山林賜う→

鎮西の道場となす

ウ　貞観九年（八六七）震災伽藍悉く倒壊して跡を留めず

※貞観九年一月には鶴見岳大噴火の記録あり（『日本三代実録』巻十四）

エ　後朱雀天皇時（一〇三六～四五年在位・平安中期）浄藏貴所之を再興→無量山朱雀院と号す

オ　久寿二年（一一五五）気備山崩壊、殿宇悉く地中に埋没

カ・鎮西八郎為朝再興、山号を田島と改める→後戦火で焼失

キ　慶長・寛永の間（江戸時代初期）

智門泰傳和尚「田島萬年山朱雀長松禪寺」と改称し、永平寺八世玉田妙高和尚を迎え、開山第一祖と為す

※慶長（一五九六～一六一五）寛永（一六二四～一六四四）

以上（キ）まで『別府市誌』昭和八年版・第二一章・第一九節「長松寺」より

ク　往昔「田島山朱雀院」と号す。この寺既に廃絶して幾星霜を経、唯茅堂のみありて、無量壽佛の古像一體を安置せり。（中略）元和弐年（一六一六）（中略）再興し、萬年山長松寺と命名、国東泉福寺第一三世玉田禅師を迎え開祖とする。

『別府市誌』　昭和八年版・第十二章社寺教会・第二節寺院より

4　ドルメン（境内に埋没）

※巨石記念物　三、四個の巨石で側面を囲み、上部に扁平な一個の巨石を乗せたもの。墳墓とされている。各地にある。

『別府市誌』　昭和八年版・第二章上代遺跡・第二節先史時代・第二長松寺境内のドルメン

配水池にて